

京都光華女子大学
研究紀要 第45号 抜刷
平成19年12月5日 発行

高井八穂・榛原保人編『類題名家和歌集』の成立

三村晃功

高井八穂・榛原保人編『類題名家和歌集』の成立

三 村 晃 功

一 はじめに

筆者は近時、古典和歌を例歌（証歌）として収載する、近世期に成立した類題和歌集の研究を進めているが、この期に成立した類題集の種類たるや種々様々で、一口で言えば、まさに多彩な様相を呈していると規定されようか。そのような多彩を極める近世類題集のなかで、筆者は過年、「証歌集」の成立」（『古代中世文学論考 第十七集』平成一八・四、新典社）を公表し、その意義、役割などに言及したが、このたび、「故人證調集」の成立——付・『宗好詠草』翻刻と初句索引——」を脱稿することを得た。当稿は近く『京都光華女子大学短期大学部研究紀要 第四十五号』（平成一九・一二）に発表予定であるが、この集は、古典和歌を主要内容とはするが、一部近世期の歌人の詠歌も含んでいる点、少々趣を異にする類題集と言えよう。

このような筆者の近時の研究状況のなかで、「証（證）歌（調）集」なる呼称をもつ書目をさらに探索していた途上で逢着したのが、高井八穂・榛原保人編『類題名家和歌集』なる類題集である。ちなみに、本集は、福井久藏

氏『大日本歌書綜覧^{上巻}』（昭和四九・五復刻版、国書刊行会）に、

類題名家和歌集 三卷

高井八穂

文化九年刊行す。◇八穂は通称伊十郎、高井宣風の詞書、古詩類題を著し、又天保八年父の集春雨集を出す。
なる紹介がある一方、『和歌大辞典』（昭和六一・三、明治書院）には、

名家和歌集^{めいかわかしふ}

（江戸期類題集）類題名家和歌集とも。榛原保人編。文化九^{二二}刊。三卷三冊。高井宣風が集

めた常縁・宗祇・長嘯子ら約四七名の歌人の和歌を四季・恋・雑に部立し、題ごとに分類列記する。収載歌数は約四〇七五首。東京大学総合図書館に天保一二^{一八}年刊行本があるほか、刊年不明本が国会図書館などに蔵される。
（辻 勝美）

という記述がなされている。ここには、編者について異同が指摘され、本集がなお検討されるべき問題点を含んでいることを示唆している。ちなみに、この編者の問題については後述するが、現時点では取り敢えず、高井八穂と榛原保人の両名を編者に想定しておきたいと思う。

このように、本集はすでに、簡略ではあるがその大略が紹介され、有益な知見は得られるが、その内容を詳細に検討してみると、編者の問題のほか、本集には素姓を明らかにすることを得ない歌人も含まれているうえに、近世期の歌人の詠作もかなり収載されている点で、『故人證謫集』と共通する側面をもつ点など、種々検討すべき課題も少なくないようだ。その意味では、本集は、近世期に成立した類題集として改めて、その具体的な内実や位相などについて検討が要請される類題集のひとつと言えるように思う。

そのようなわけで、本稿は、例よつての蕪雑な作業報告にすぎないが、これまで辞典類以外にはほとんど言及されることのなかった『類題名家和歌集』について、成立の問題を中心に据えて考察を加えてみた論考である。大方の厳しいご批評を賜らば、幸甚に思う次第である。

二 書誌的概要

さて、本集の伝本について、『私撰集伝本書目』（昭和五〇・一一、明治書院）によれば、

728 類題名家和歌集 高井宣風（八穂） 文化九年

類題名家和歌集 三 文化九年刊 慶大・明大毛利本^{五冊、別本か} 帝塚山短大（911・一五・R四）

類題名家和歌集 三 天保一二刊 東大葵文庫

類題名家和歌集 三 刊 刈谷市村山文庫

のごとき情報を得ることができる。そこで、今回底本に選んだ、白杵市立白杵図書館蔵の文化九年刊行の版本を対象にして考察を進めていきたいが、筆者は該本については未見であるので、国文学研究資料館蔵のマイクロ・フィルム（258・81・8）によって紹介すれば、おおよそ次のとおりである。

所蔵者 白杵市立白杵図書館 蔵（和／55）

編著者 高井八穂・榛原保人

体裁 中本（縦一八・三センチ、横一二・一センチ） 三冊 版本 袋綴じ

題籤 類題名家和歌集 上（中・下）

内題 名家和歌集春之部（〱雑之部）

匡郭 なし

各半葉 十一行（和歌一首一行書き） 序十一行

総丁数 百九十九丁（上冊〈序・春之部・夏之部〉・七十丁、中冊〈秋之部・冬之部〉六十二丁、下冊〈恋之

部・雑之部〕六十八丁)

総歌数 四千七十四首(春之部・八百七十六首、夏之部・六百十首、秋之部・七百五十九首、冬之部・五百二首、

恋之部・七百二十一首、雑之部・六百六首)

柱刻 なし

序 高井八穂・榛原保人

跋 なし

刊記 文化九年申正月／本石町十軒店／萬笈堂 英平吉／大伝馬町／瑞玉堂 大和田安兵衛

印記 大正八年／稲葉家／十月廿一日／寄贈(上冊見返し)

以上から、本集は春之部・八百七十六首、夏之部・六百十首、秋之部・七百五十九首、冬之部・五百二首、恋之部・七百二十一首、雑之部・六百六首の、都合四千七十四首を収載する、中規模の類題集と規定できようか。

三 歌題の問題

以上、本集の書誌的概要について言及したが、それでは、本集は類題集としていかなる属性を有しているのか、歌題の視点から検討してみたいと思う。

ところで、本集の誌面の体裁は三段組で、歌題、例歌(証歌)、作者となっているが、例歌(証歌)に付せられた歌題について、各部立別に掲げると、

春之部	四百三十題	夏之部	二百七十題	秋之部	三百七十一題
冬之部	三百四十六題	恋之部	二百九十六題	雑之部	三百六題

合 計 二千十九題

のとおりである。ちなみに、本集の収録するこの歌題数がいかなる位相にあるのか、ここで標準的な類題集との比較を試みてみると、次の（表1）のごとくである。

（表1） 主要な類題集との歌題数比較一覧表

集名	部立	春	夏	秋	冬	恋	雑	合計
類題名家和歌集		四三〇	二七〇	三七一	三四六	二九六	三〇六	二〇一九
二八明題和歌集		三一七	一五一	三四五	一八二	二五九	九九二	二二六九
題林愚抄		四〇八	二八二	五五五	三二六	四五二	五六八	二五五一
明題和歌全集		四七六	二九三	五九〇	三三七	四五七	九七三	三一二六
類題和歌集		一二五八	一一〇一	二四七〇	一二七九	一四七九	一二九八	一〇八八五
新類題和歌集		三〇三九	一七四一	三七〇五	一八四四	二一〇九	三六七三	一六一一一

この（表1）をみると、本集の歌題数は、『類題和歌集』『新類題和歌集』を除くならば、他の類題集に比べてそれほど差異のないことが認められようが、この点を、夏之部に収載する「瞿麦」関係の歌題で具体的に検証してみたいのが次頁の（表2）である。

ちなみに、（表2）における略号は、「A」が『類題名家和歌集』、「B」が『二八明題和歌集』、「C」が『続五明題和歌集』、「D」が『題林愚抄』、「E」が『明題和歌全集』、「F」が『類題和歌集』を、それぞれ意味している。

計	歌題				集名
	簷菖蒲	閨菖蒲	袖上菖蒲	旅宿菖蒲	
三					A
二	○				B
一					C
七	○	○		○	D
七	○	○		○	E
二二	○	○	○	○	F

この（表2）に掲げたのは、中世から近世初期にかけて成立した代表的な類題集だが、このうち、「菖蒲」関係の歌題を二十一題収録している『類題和歌集』が充実した内容をみせるなかで、七題を掲げる『題林愚抄』『明題和歌全集』に続いて、本集が、一題の『二八明題和歌集』、二題の『続五明題和歌集』を凌駕して三題を収載している実態は、歌題収録数の点では、他の類題集と比較してそれほど遜色のない様相を呈していると言えるであろう。

ちなみに、参考までに「菖蒲」の属性について『和歌題林抄』から引用すれば、

34 菖蒲 あやめ草、ながきねひく、軒にひく、たもにかく、ひくてもたゆく、よしのかくれぬ、つくま江、ぬま、うき

人しれぬまにおふとも、人の心のうきにおふとも、恋ぢにおふれば袂にねはかゝるとも、かくれぬにおふれば、名はあらはれぬとも、ながきねはひくてもたゆしとも、玉のうてなも、しづがふせやも、あまねくふくとも、草の庵にはふけどもみえわかぬとも、けふばかりのつまなればあだなりとも、あやめの枕をみれば、ふしなれたるせこも、たび心ちすともよむ。

つくま江の底のふかさをよそながらひけるあやめのねにもしるかな

あやめ草よどのに生る物なればねながら人にひくにぞありける

のとおりである。「菖蒲」が「しょうぶ」を意味することは言うまでもないが、『和歌大辞典』（滝沢貞夫氏執筆）によると、菖蒲が歌題として初めて登場するのは「寛和二年（九八六）六月十日内裏歌合」だが、「実作は菖蒲の根・引く・生ふ・掛くの言葉の縁による観念的詠で、条理・憂しによる恋愛感情・述懐の情をからませた詠はほとんどない。」由である。なお、本集が「菖蒲」の単独題のほかは「池」「江」との結題を掲げている点は、「菖蒲」の基本的・素朴な属性を示しているといえようか。

四 収載歌の問題——撰集資料と詠歌作者

さて、本集が総歌数四千七十四首を収載する、中規模程度の類題集であることについてはすでに言及したが、それでは、本集の収載歌はいかなる経過を経て本集に収載されたのであろうか。ところで、本集の掲載内容を紹介すると、歌題、例歌（証歌）、詠歌作者の順で、一行書きによって示されているが、ここに上・中・下冊のなかから任意に、「雪中鶯」（上）、「七夕橋」（中）、「憑誓言恋」（下）の例歌（証歌）と詠歌作者を引用してみよう。

雪中鶯（春之部）

- 1 花としもえやはみ雪の山かげにこゝろもしらぬうぐひすのなく
（宗祇・二二六）
- 2 ゆきは猶ふるすながらにうちとけてなく音はるなる谷のうぐひす
（宣長・二二七）
- 3 うちわたす竹田のはらの雪のうちに鶯なきぬはるの初声
（真淵・二二八）
- 4 消あへぬゆきの梢にいとはやも花やをそしと来なくうぐひす
（亨弁・二二九）
- 5 花とちるそのふのはるの白ゆきににほひをそふるうぐひすの声
（千蔭・二二〇）

七夕橋（秋之部）

- 6 天川もみちのはしはあはぬまのなみだのつゆやかけてそめけむ
 （亨弁・一五四二）
- 7 かさゝぎのわたすあふせのあまの川それも一よのゆめのうきはし
 （同・一五四三）
- 8 神代よりもみちのはしを彦ぼしのわたれどにしき中はたえせず
 （宣長・一五四四）
- 9 此ゆふべ玉ばしわたすあまの川ふりさけ見んに雲ながくして
 （同・一五四五）
- 10 かさゝぎのわたせるはしにかたしきて秋さり衣つまやまつらん
 （貞徳・一五四六）
- 11 あはぬまのなみだのしぐれそめてこそ紅葉のはしをけふわたすらめ
 （玉山・一五四七）
- 12 ふりぬともそらにくだすなたなばたにかけしたのみのひとつたな橋
 （蘆庵・一五四八）

憑誓言恋（恋之部）

- 13 はかなしやちゞの社にかけずともたゞ一ことにみえんまことを
 （宗祇・二九二七）
- 14 千とせまで此ことのはもかはらじとかけてぞちかふ神がきの松
 （宣長・二九二八）
- 15 いもとせの中にながる、川水のたえんよにこそ君とかれなめ
 （千蔭・二九二九）

この1～15の三歌題のもとに配列されている例歌の原拠資料とその歌題を探てみると、まず1～5の「雪中鶯」題下のうち、1と2の詠は各々、『宗祇集』（四）、『鈴屋集』（六七）に本集と同題で掲出される一方、3～5の詠は各々、『賀茂翁家集』に「うぐひすを」、「招嘲集」に「鶯」、「うけらが花初編」に「雪中鶯声」の題を伴って収載されているので、1～5の詠は、1・2が原拠資料の題と符合するものの、3～5の詠は原拠資料の題とは異なるという実態が知られよう。

次に、「七夕橋」題の6～12の六首を検討してみると、6・7と10の詠は各々、『招聴集』（二九四・二九五）と『逍遙集』（一〇四八）に本集と同題で載る一方、8・9と11の詠は各々、『鈴屋集』（六〇〇・一七二七）と戸田茂

睡編の私撰集『鳥の跡』（二九〇）に「七夕」の題で掲出されているが、12の詠は蘆庵の私家集『六帖詠草』『六帖詠草拾遺』に収載をみていない。この点、「七夕橋」題の例歌（証歌）は原拠資料と符合する場合もあれば異なる場合もある一方、撰集資料とおぼしき私撰集の歌題と異同したり、自身の私家集に欠く場合も指摘されて、種々様々の様相を呈しているようだ。

最後に、「憑誓言恋」題の13・15の三首の場合は、13の詠が『宗祇集』（二一四）に本集と同題で載る一方、14と15の詠は各々、『鈴家集』（一〇八七）と『うけらが花初編』（一〇〇六）に「誓恋」題で収載されて、本集の例歌採録状況に、原拠資料が想定されたり、対象外であったりする実態が認められるようだ。

以上、本集に収載される任意に選んだ歌題と例歌を検討した限りでは、その撰集資料に私家集などの原拠資料を想定することは困難であり、また、11の例歌や、上野洋三氏編『近世和歌撰集集成 第一巻―第三巻』（昭和六〇・四、同六二・七、同六三・一、明治書院）などを参照して調査しても、撰集資料に私撰集や類題集を想定することは不可能であって、総じて、現時点で本集の撰集資料を特定することは不可能と言わざるを得ないといえよう。

それでは、本集に収録される例歌（証歌）四千七十四首の詠歌作者はどのような人物であろうか。次に、この問題の検討から、本集の内幕に迫ってみたいと思う。

次の（表3）は本集に収載される詠歌歌人のすべてである。

（表3）「瞿麦」関係の歌題比較一覧表

作者		歌数	
1 宣 風		五〇九首	
2 宣 長		二九三首	

作者		歌数	
3 幸 隆		二七四首	
4 宗 固		二五三首	

作者		歌数	
5 長嘯子		二一六首	
6 松 軒		一九五首	

この（表3）をみると、本集には総勢五十人の詠歌作者が収載されている実態が知られ、予想以上に特定の歌人層に限定されている事実に驚かされよう。そこで次に、本集の収載歌人五十人を、時代順に分類し、その生没年な

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	作者	歌数
芦 (蘆庵)	元 (玄政)	契 冲	空 阿	宗 祇	沢 庵	春 (東磨)	蒼 生子	常 縁	貞 徳 (延陀丸)	馬 渕	千 蔭	似 雲	長 伯	亨 弁		
五 五 首	五 九 首	七 八 首	八 七 首	一 〇 三 首	一 〇 七 首	一 一 一 首	一 一 二 首	一 一 五 首	一 六 一 首	一 六 三 首	一 六 九 首	一 八 二 首	一 八 六 首	一 八 八 首		
35	35	34	33	31	31	30	29	27	27	25	25	24	23	22	作者	歌数
維 (惟損)	影 面	敬 儀	惟 足	真 清	古 軒	信 頼	信 徳	慈 延	萬 蹊	道 灌	玉 山	長 流	桂 山	重 明		
一 二 首	一 二 首	一 三 首	一 五 首	二 〇 首	二 〇 首	二 二 首	二 四 首	二 八 首	二 八 首	二 九 首	二 九 首	三 一 首	四 二 首	五 〇 首		
合 計	49	49	48	46	46	45	43	43	41	41	39	39	38	37	作者	歌数
	重 頼	在 満	い さ 子	信 遍	元 就	高 門	忠 次	景 栖	茂 睡	宜 珍	諸 鳥	季 吟	澄 月	清 亭		
四 〇 七 四 首	一 首	一 首	二 首	三 首	三 首	四 首	七 首	七 首	八 首	八 首	九 首	九 首	一 〇 首	一 一 具		

どの情報をも提供して、本集の性格に迫ってみたいと思う。

13 東常縁 生年未詳～文明十六1484年頃没か。

25 太田道灌 永享四1433年～文明十八1486年七月二十六日、五十五歳。

17 飯尾宗祇 応永二十八1421年～文亀二1502年七月三十日、八十二歳。

46 毛利元就 明応六1497年～元亀二1571年六月十四日、七十五歳。

16 沢庵 天正元1573年～正保二1645年十一月十日、七十三歳。

5 木下長嘯子 永禄十一1568年～慶安1649年六月十五日、八十二歳。

49 金森重頼 文禄二1594年～慶安二1650年閏十月七日、五十七歳。

12 松永貞徳 元亀二1571年～承応二1653年十一月十五日、八十三歳。

43 榊原忠次 慶長十1605年～寛文五1665年三月二十九日、六十一歳。

20 石井元政 元和九1623年～寛文八1668年二月十八日、四十六歳。

31 永井直清 天正十九1591年～寛文十一1671年一月九日、八十一歳。

24 下河辺長流 寛永二1627年～貞享三1686年六月三日、六十一歳。

33 吉川惟足 元和二1616年～元禄七1694年十一月十六日、七十九歳。

25 山名玉山 元和九1623年～元禄七1694年、七十二歳。

19 契沖 寛永十七1640年～元禄十四1701年一月二十五日、六十二歳。

48 鷲見いさ子 元禄十五1702年成立の竹内時安斎岑延編『清地草』に収載。

39 北村季吟 寛永元1624年～宝永二1705年六月十五日、八十二歳。

41 戸田茂睡 寛永六1629年～宝永三1706年四月十四日、七十八歳。

- 3 松井幸隆 寛永1624年-44年頃～正徳1711-16年頃か。
- 45 京極高門 万治元1658年～享保六1721年二月十七日、六十四歳。
- 15 荷田春曆 寛文九1669年～元文元1736年七月二日、六十八歳。
- 8 有賀長伯 寛文元1661年～元文二1737年六月二日、七十七歳。
- 49 荷田在満 宝永元1704年～宝暦元1751年八月四日、四十六歳。
- 9 似雲 延宝元1673年～宝暦三1753年七月八日、八十一歳。
- 7 亨弁 生年未詳～宝暦五1755年七月二十日、五十歳前後か。
- 46 成島信遍 元禄二1689年～宝暦十1760年九月十九日、七十二歳。
- 30 雀部信頼 宝暦十1760年、『己邇乎波義慣抄』を出版。
- 23 川合桂山 宝永五1708年～明和三1766年七月二十日、五十九歳。
- 11 賀茂真洵 元禄十1667年～明和六1769年十月三十日、七十三歳。
- 4 萩原宗固 元禄十六1703年～天明四1784年五月二日、八十二歳。
- 14 荷田蒼生子 享保七1772年～天明四1786年二月二日、六十五歳。
- 31 古軒 天明六1786年、『星使のつゆ』を出版。
- 39 林諸鳥 享保五1720年～寛政二1790年八月十九日、七十一歳。
- 6 伊藤松軒 宝永六1709年～寛政六1795年十月三十日、八十六歳。
- 29 唐崎信徳 元文二1737年～寛政八1796年十一月十八日、六十歳。
- 37 西山澄月 正徳四1714年～寛政十1798年五月二日、八十五歳。
- 21 小沢蘆庵 享保八1723年～享和元1801年七月十一日、七十九歳。

- 2 本居宣長 享保十五1730年～享和元1801年九月二十九日、七十二歳。
- 27 慈延 寛延元1748年～文化二1805年七月八日、五十八歳。
- 27 伴蒿蹊 享保十八1733年～文化三1806年七月二十五日、七十四歳。
- 35 村上影面 享保十五1730年～文化四1807年十一月十八日、七十八歳。
- 10 加藤千蔭 享保二十1735年～文化五1808年九月二日、七十四歳。
- 34 田山敬儀 明和三1766年～文化十一1814年四月十九日、四十九歳。
- 18 空阿 生年未詳～文化十二1815年一月十五日没。
- 22 小泉重明 宝暦五1755年～文政十1827年、七十三歳。
- 41 上田宜珍 宝暦四1754年～文政十一1829年九月二十五日、七十五歳。
- 1 高井宣風 寛保三1743年～天保三1832年一月二十九日、九十歳。
- 35 維（惟）損 生没年ほか未詳。
- 43 景栖 生没年ほか未詳。
- 37 晴亭 生没年ほか未詳。

以上、本集に収載される歌人を時系列によって列举してみたが、大略すれば、室町期歌人と江戸期歌人の二系統に分類されよう。このうち、室町期において特筆されるのは、『古今集』の解釈に関する秘説を師から弟子へ伝える、いわゆる古今伝授が秘伝化され、権威化されるに至った最大の功労者である、東常縁とその伝授者たる飯尾宗祇の詠作が大量に採歌されるなかに、当代の武将であった太田道灌と戦国大名たる毛利元就の両名が選出され、その詠歌が収載されていることであろう。

一方、江戸期においては、先述の古今伝授を、宗祇から継承して二条派伝授を確立した細川幽斎から相伝され

た、寛永以降の地下派の松永貞徳および弟子の北村季吟・石井元政、また貞徳と親交のあった木下長嘯子の詠歌が数多採録されるなか、少々時期は下るが武者小路実陰から伝授を受けた似雲の詠作も大量に収載される一方、古今伝授や制詞などに批判的態度を採った戸田茂睡の歌がみえるのは興味深いといえようか。なお、地下派の一流である有賀長伯とその弟子桂山の詠作も収載されている。

ところで、さきに触れた長嘯子に私淑して和歌を学んだ下河辺長流に、徳川光圀から『万葉集』の註釈の依頼があったが病氣のために果たせず、親交のあった契沖にそれを譲った結果、契沖が『万葉代匠記』を鋭意、完成させたのは有名な話である。本集にこれらの長嘯子・長流・契沖の三歌人の詠歌が多数みられるのも本集の属性といえようが、この契沖の万葉研究が国学の基礎となった文献学的方法を確立し、京都伏見稻荷神社の神官であった荷田東麿やその学統下の県居派の賀茂真淵、その弟子筋の鈴屋派の本居宣長、江戸派の加藤千蔭たちに影響を与えたことは、周知の事柄に属しよう。本集にこれらの歌人の詠歌が数多く収載されているのは(表3)で示したとおりだが、ちなみに、本集には東麿の家系に連なる蒼生子や在満の名もみえている。

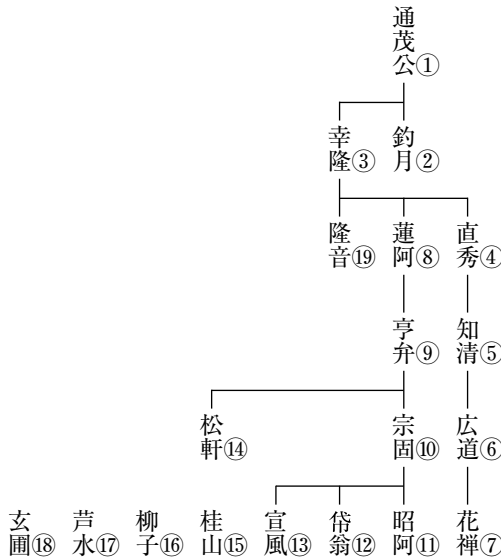
なお、冷泉為村門に入り宣長らとも親交があったが、安永二(一八〇一)年頃、為村から破門された後、作為や技巧を排して、平易な言葉で真情を詠じる、いわゆる「ただごと歌」を提唱した小沢蘆庵に、西山澄月、伴蒿蹊、慈延の三人を加えて、当時平安四天王と称された歌人の詠作が、蘆庵の弟子田山敬儀の歌とともに、本集に採歌されている実態も見のがせないであろう。

以上、本集に収載される詠歌作者(歌人)の時系列の視点から、その属性に言及してきたが、そのような歌人収載状況のなかでも、本集をもっとも特徴づけるのは、江戸堂上派に属する歌人の詠作を大量に収載していることではなかろうか。

ちなみに、松野陽一氏『江戸堂上派歌人資料

習古庵亨弁著作集』(昭和五五・七、新典社)は、亨弁を中核に据えて

江戸派堂上派歌人の動静を豊富な資料に基づいて明らかにした労作だが、そのなかで江戸堂上派の学統について、蓮阿門弟の亨弁の歌学書『再治視聴筆削抄出』（慶応義塾大学図書館蔵）に付載されている『関東歌道系伝』に言及した論述は、とりわけ有益である。その『関東歌道系伝』を参照すると、江戸堂上派の人脈が次のごとく系譜によって示されている。



この『関東歌道系伝』に示された江戸堂上派の学統は、松野氏によれば、京都で町奉行組与力を勤めながら、歌学を中院通茂に学んでいた松井幸隆が、晩年の正徳年間（1711～19）頃に、太田資晴や六郷政晴の要請によって江戸に下って、歌学を相伝しはじめた点に、その始源が認められる由である。すなわち、『関東歌道系伝』には、総

勢十九人による系譜が示されているわけだが、このうち、本集に収載される歌人は、③松井幸隆、⑨亨弁、⑩岡本宗固、⑬高井宣風、⑭伊藤松軒、⑮川合桂山の六人だが、本集に収録の詠歌数の順では、一位高井宣風、三位松井幸隆、四位岡本宗固、六位伊藤松軒、七位亨弁、二十三位川合桂山のとおりであって、ここに本集では、江戸堂上派歌人が圧倒的に上位を独占している実態が知られよう。

以上、本集の内実を詠歌作者の視点から探索し、ある程度の傾向を把握しえたが、それでは何故に、本集ではこのように江戸堂上派の歌人が優遇されているのであろうか。その点については、次の章節で改めて詳細に論述することになろう。

五 編纂目的と成立などの問題

以上、歌題と詠歌作者の視点から、本集の内実について大略、検討してきたが、次に、本集の成立と編者などの問題について検討を進めたいと思う。

まず、本集の編纂目的に言及すれば、本集の巻頭に掲げられている、高井八穂と榛原保人の両名による個別の序文が、かなりの示唆を与えようと判断されるので、以下に、その序文を掲げておこう。

此集は世に名のきこえし人たちのよみ置給ふけりし歌を、父の年ごろあつめられしは、火のためにけふりとなりたり。はた、かく聞伝へにかいつらねられしを、人々うつしとらまくこふ。よて、筆の労をたすけんと、此三人の板にゑりてあたへむとす。

各故人のうたのみなり。人しらずうづもれんことをおしむとて、家々にひめをかれしをこふに、もとめがたくもれたるは、いとかひなし。ありのすさびによみをかれしを、かくい給ふは、よみ人のこゝろにもたがふべ

し。かくそふならば、いかでよみ置給はむ。

聞つたへあるは、人の書をきしなどを、かく部類しければ、家の集などにたがふ事のなきにしもあらじ。さるは、補ひたまへかし。

父のうたはいなびてくはへざりしを、哥のたらはぬ処々のくさびにと、せちにそゝのかされて、御点たまはりしを、いさゝかくはへたり。七十にもみてる翁のわざ見ゆるし給ふべし。

こゝにもれしは、後編にくはふべし。後編は新古のわかちなく、だれのうたをもくはふべければ、ひめをかずして給ふべし。部類すれば、ちりばはずしてつたはりぬらむ、と父のはいなり。

家の集などは、其人ひとりの哥にて、ことゝくは集もなく、後ゝは人しれずなりぬべき事をいとなげかしく、こたびかく三巻として、のちにもつたはれとてなむ。

八穂

よに名のきこえし人たちのよみをかれ給ふけりしを、とし比翁のあつめられしは、火のためにけぶりとなりたり。そがのちに、かくのごとくきゝつたへにかきつらねられしを、人々うつしとらまくこふ。よて、をのれふんでの労をたすけむと、板に多りてあたふ。

みな故人の哥也。人しれずうづもれんことを惜とて、家々にひめをかれしを、もとめられし中に、もとめがたくもれたるは、かひなし。

きゝつたへあるは、人の書をきしを部類しなければ、家の集などにたがふことのなきにしもあらじ。さるは補ひたまへ。

翁の哥はくはへざりしを、哥のたらはぬ所ぐのくさびにと、せちにもとめてくはへたり。

こゝにもれしはまたのちにあつむるに、いにしへ今のわかちなく加ふべければ、ひめをかずしてたまふべし。

かく部類すれば、ちりはずしてつたはりぬらむ、とおきなのはい也。

榛原 保人

この高井八穂と榛原保人の両名による序文の内容を吟味するに、不思議なことに、ほぼ同内容であることが知られよう。そこで、両者の序文を総合して要約してみると、本集は「世に名の聞こえし人たちの詠み置き給ひけりし歌を」、高井八穂の父・宣風が蒐集し、また、他人が「聞き伝へに書き連ねられし」歌稿を蒐集していたが、それらの情報を仄聞した「人々（がその歌稿を）写し取らまく（思つて）乞ふ」ので、かれらの「筆の労を助けんと」企図して、「此三人」（をのれ）が撰集して版行に至ったというのだ。ちなみに、八穂と榛原の序文では「板に選りてあたへ」た人物に異同があつて、前者では八穂と榛原のほかにもう一人、都合「此三人」が、後者では榛原が各々、その任に当たつたとしているが、八穂のいう三人に「宣風」を想定するのは無理と判断されるので、ここは一応、高井宣風と榛原保人の二人を編者に想定しておきたいと思う。

こうして蒐集された歌稿はいずれも「各故人の歌のみ」で、その蒐集に当たつては種々様々な事情があつて一様ではなかったが、本集の「部類」に当つては、二人の編者は全体のバランスを考慮して、「哥の足らはぬ処々のくさびにと、（中略）御点たまはりし」詠作に限つて、高井宣風の歌を付加したという。

ちなみに、本集に「漏れしは、後編」が予定されて、その「後編は新古の分かちなく、誰の歌をも加ふ」ことが目論まれているので、今回の本集および今後刊行予定の「後編」の編纂意図には、「家の集などは、其一人の哥にて、悉くは集もなく、後々は人知れずして」散佚してしまうことを懸念した高井宣風の「本意」が反映している、とこの序文は結ばれている。

これを要するに、本集の編纂目的は、編者たちの活躍していた当今において、高井宣風が鋭意蒐集していた、「故人」の「名家」（有名人）たちの詠歌を中核にして、それに現存の高井宣風の詠作も加えて「部類」された類題集を編纂して、当該歌の散佚を免れようとした営為に認められると言えるであらうか。

ところで、本集の成立の問題だが、この点については、編者の高井八穂と榛原保人が深く関わっているゆえに、その知見を求めるに、現在、後者については未詳の事柄に属するので、以下には、高井親子の宣風と八穂の情報を、『日本人名大事典4』（昭和五四・七覆刻版第一刷、平凡社）から紹介しておこうと思う。

タカイノリカゼ 高井宣風（一七四三—一八三二） 徳川中期の歌人。常盤井氏。通称伊十郎、八十郎、号を春雨亭といふ。信濃の人、江戸に住す。初め道具屋を業としたが、歌道を日野資枝、萩原宗固に修め、麹町に家塾を開いて和歌の宗匠となり、武蔵忍藩主阿部正由、川越侍従、日野資矩、外山光実らの愛顧を受け、歌名漸く高く、本居宣長、加藤千蔭、村田春海らとも風交があつた。著書に『萬葉集残考』、歌稿『春雨集』がある。天保三年正月二十九日没す。年九十。

（森繁）

タカイヤツホ 高井八穂 徳川中期の国学者。江戸の人。宣風の子。通称弥三郎のち伊十郎と改む。国学に志して本居宣長の門に入り、加藤千蔭、林田春海らと親交があり、従ひ学ぶ者が多かった。生没年未詳。『古今仮名遣』『古詞類題和歌集』の著があり、また父の『言葉書題集』を編集し、また天保八年父の和歌を集めて『春雨集』を上梓した。

このうち、高井八穂の生没年については、現時点では未詳に属する事柄だが、本集の成立については、刊記に文化九年申正月

本石町十軒店

萬笈堂 英 平吉

大伝馬町

瑞宝堂 大和田安兵衛

の記述が存するので、本集の刊行年月が文化九年（一八一二）正月であることは言を待たまい。

ところで、本集の成立の問題に示唆を与えるのが、八穂の記した序文のなかの「七十にも充てる翁（宣風）のわざ」の文言である。この記事の内容を、宣風の七十歳の営為とみなすならば、驚くべきことに、それはまさに文化九年が該当するのである。となると、本集の刊行年月が同年正月であるわけだから、常識的に考えるならば、本集の成立は、その前年の文化八年（一九一二）中には完成していたであろう、と推測されるのではなかろうか。

最後に、本集の近世中期ごろの類題和歌集成立史における位相に言及すべく、表題に「名家」なる用語を含む作品を列挙するならば、おおよそ次のとおりである。

- 1 名家摘（寛政十二年〈1800〉刊、杉野翠兄著、一冊）
- 2 名家拾葉集（同、榎鳩ほか編、二冊）
- 3 類題名家和歌集（文化九年〈1812〉刊、高井八穂・榛原保人編、三冊）
- 4 名家略伝（天保五年〈1834〉刊、山崎美成著、四冊）
- 5 名家発句類題集（天保八年〈1837〉刊、三志著、四冊）
- 6 近世名家集類題（天保十四年〈1843〉刊、鈴木重胤著、四冊）
- 7 今世名家文鈔（安政二年〈1855〉刊、月性編、八冊）
- 8 近世名家詩鈔（万延二年〈1861〉刊、関重弘・藤田亀編、三冊）
- 9 名家肖像集（成立年未詳、写本、二帖）
- 10 名家肖像大鑑（同、一冊）
- 11 名家画譜（同、丹羽桃溪編、刊本、一冊）
- 12 近世名家書画談（同、安西雲煙著、完本、四冊）

- 13 名家手簡（同、山内香雪著、刊本、十九冊）
- 14 名家世系譜（同、写本、一冊）
- 15 今世名家発句集（同、文和編、写本、一冊）
- 16 名家短冊帖（同、梅仙編、刊本、一冊）

ちなみに、「名家」なる用語を含む作品では、伝紀貫之筆になる、在原元方・清原深養父・坂上是則・藤原興風・同兼輔・源公忠など、平安時代の名ある歌人の家集の断簡を蒐集した『部類名家集』が、おそらくもつともはやい時期のものと憶測されようが、ここには近世期に成立したと推測される各分野の作品を列記してみた。すなわち、1・4などが伝記的な視点からのもの、2・3・6・16などが詠歌を集めたもの、5・15などが発句を蒐集したもの、7・13などが自由な散文の視点からのもの、8が漢詩を蒐集したもの、9・10・11・12などが主に画像の視点からのもの、14が系譜の視点からのものと、おおよそ分類できるようだ。

このうち、近世中期ごろの類題和歌集成立史に関係するのは2・3・6・16などの作品であろうが、ただ2の『名家拾葉集』については少々問題が存するので、説明を付しておこう。それは拙稿『『名家拾葉集』の成立』（『京都市立女子大学研究紀要 第四十四号』平成一八・一二）で言及したように、『名家拾葉集』なる類題集が実は、享保十七年（一七三二）に、坂静山編『和歌山下水』を一部省略した形で復刻した、完全なる盗作版であるからだ。何故にこのような不祥事が行われたのかの問題については、現時点では筆者はその解明をなしていないが、ともかく『名家拾葉集』が『和歌山下水』の完全なる復刻版であることは事実であるから、当面の問題からは『名家拾葉集』を除外して扱うのが妥当な判断といえるであろう。となると、文化九年（一八一二）に刊行された『類題名家和歌集』が「名家」なる用語を書名にもつ類題集としては最初の類題集になろう。ちなみに、この種の類題集の

刊行は、ほぼ三十年が経過した天保十四年に版行された『近世名家集類題』を待たなければならないわけだから、要するに、『類題名家和歌集』は、この時期におけるこの種の類題集のなかでは嚆矢の位相にあるといえるのではなからうか。

六 おわりに

以上、『類題名家和歌集』について、種々様々な視点から基礎的考察を加えてきたが、ここでこれまでの検討・考察をとおして得られた結果を、箇条書きに摘記して、本稿の一応の結論にしたいと思う。

(一) 『類題名家和歌集』の伝本には、現在のところ、いずれも版本ではあるが、文化九年刊、天保十二年刊、刊年未掲載の三種類が存する。本稿ではこのうち、白杵市立白杵図書館蔵にかかる文化九年版(三冊)を利用した。

(二) 本集は総丁数百九十九丁(上冊〈序・春之部・夏之部〉・七十丁、中冊〈秋之部・冬之部〉・六十一丁、下冊〈恋之部・雑之部〉・六十八丁)を数える。

(三) 総歌数は四千七十四首(春之部・八百七十六首、夏之部・六百十首、秋之部・七百五十九首、冬之部・五百二首、恋之部・七百二十一首、雑之部・六百六首)で、中規模の類題集といえようか。

(四) 本集に収録される歌題は、近世期に版行された類題集『題林愚抄』『明題和歌全集』と比較しても、まったく遜色のない規模と内容である。

(五) 本集に収録される例歌(証歌)の撰集資料は、目下、未詳と言わざるを得ず、そこに原拠資料の私家集、および私撰集や類題集を特定することは不可能である。

(六) 本集の詠歌作者のうち、百首以上の詠作が収載されるのは、高井宣風・本居宣長・松井幸隆・萩原宗固・木下長嘯子・伊藤松軒・習古庵亨弁・有賀長伯・似雲・加藤千蔭・賀茂真淵・松永貞徳(延陀丸)・東常縁・荷田蒼生子・同春磨・沢庵・飯尾宗祇などで、室町後期から江戸中期ころの歌人である。

(七) 本集の収載歌人のなかでは、江戸堂上派に属する歌人が大半を占めているところに、本集の属性が認められるようだ。

(八) 本集の編纂目的は、高井八穂と榛原保人の序文によれば、編者たちの活躍していた当今に、高井宣風が鋭意蒐集していた「故人」の「名家」たちの詠歌を中核にして、現存の宣風の詠作も加えた類題集を編纂し、当該歌の散佚を免れようとした営為に認められようか。

(九) 本集の編者には、高井八穂と榛原保人の兩人が想定されるであろう。

(十) 本集は文化八年(一八一二)までには成立をみていたものと推定されるであろう。

(十一) 本集の刊行年月は、刊記から文化九年(一八一三)一月と規定できる。

(十二) 本集のように、書名に「名家」なる用語を含む近世中期ごろに成立した著作は、およそ十六編ほど見出しうるが、そのなかで類題集はほんの数編でしかないものの、あえてその類題集成立史に言及すれば、本集はそのなかでは嚆矢にあたる位相にあると言えようか。

なお、本集についてさらに検討しなければならない問題は、数多存するといえようが、一応の基礎的考察を終えたいまは、それらの残された問題は今後の課題とすることにして、このあたりで蕪雑な作業報告はひとまず、措くことにしたいと思う。